

新連載：Who's Who. ～オーディオのレジェンド～ 第1回
エソテリック株式会社 大間知 基彰 氏を訪ねて
聞き手 編集委員 森 芳久

今月より新連載 Who's Who.がはじまります。サブタイトルに～オーディオのレジェンド～とあるように、これは日本のオーディオ黎明期から今日まで深くオーディオに携わり大きな貢献をされた方々を紹介するものです。今日のオーディオの発展や素晴らしい音の世界を築かれてこられた先達の功績を讃えるとともに、敬意を表したいと考え企画しました。

取材はJAS ジャーナル編集委員各自が持ち回りとし、その紹介方法もインタビュー式、取材者による紹介式など自由形式で進めたいと考えています。

まず第1回は、エソテリック株式会社の初代社長を務め、現在も顧問としてエソテリック全製品の最終的な音質決定やSA-CDソフト制作などの重責を負われる大間知基彰氏をご紹介します。

JAS ジャーナルの読者ならば大間知氏を知らない人はいないのではと思いますが、ご本人とのインタビューを通して改めて氏の業績を振り返ってみました。

森（以下M）. 大間知さん、さっそくですがオーディオの道を志されたきっかけをお伺いできますか？

大間知氏（以下O）. 私は学生時代からクラシック音楽が好きでしたので、レコードは良く聴いていました。そんなときに後藤精弥さんのゴトーユニットのホーンにしばれ、オーディオの虜となったのがはじまりですね。

M. そのころどんなレコードを聴かれていたのですか？

O. アンセルメの三角帽子やショルティのワグナーものなどが大好きでした。またブルーノ・ワルターも好きでした。当時はちょうど、モノからステレオへの過渡期でしたが、DECCAやドイツグラモフォンなどの海外盤の音が良かったですね。

M. それで、趣味が嵩じてTEACに入社されたのですか？

O. はい。私は日本大学で経済学を専攻していましたが、どうしてもオーディオの仕事がやりたいくて、当時憧れのテープレコーダー・メーカーTEACに直接就活をしたのです（笑）。私の情熱が伝わったのか、創業者の谷社長から「新入社員は技術者しか採らないが、そんなにオーディオが好きならば良いだろう」と入社許可をいただきました。その代わり「入社するなら早く来い」といわれて、まだ在学中から通勤することになりました（笑）。



大間知 基彰 氏

M. それは異例の待遇でしたね。最初はどんな仕事だったのでしょうか？

O. 6ヶ月位でしたか、もっぱらテープレコーダーの修理をやっていました。おかげで、壊れやすい部品やその原因を熟知することができました。同時にユーザーがその製品をどのように使っているかを詳しく知ることもできたのです。これはその後の商品企画にとっても役立ちました。

M. それで大間知さんの企画した商品は使いやすく故障も少なく、ベストセラーになったのですね。大間知さんが手がけた初期の製品をご紹介ください。

O. おかげさまでいろいろな製品を手がけましたが、初期の製品で特に印象に残るものでは1968年発売のオープンリール・デッキ A-4010 や、1972年発売のカセットデッキ A-450 などです。どれも私も欲しい製品でしたので熱が入りましたね。



M. A-4010 は確か、4トラックの自動往復再生が可能な4ヘッド方式で話題となった製品ですね。また A-450 は、そのユニークなデザインもさることながら、ドルビーシステムが搭載され、当時としては画期的なカセットデッキでしたね。

O. はい。A-4010 は当時最新の技術とアイデアを投入したオープンリール・デッキの自信作です。また TEAC では早くからカセットデッキの音質改善のためドルビーシステムを検討し、最初のモデルの A-350、A-250 などドルビーを採用しました。

M. この頃から日本でも生の演奏を録音・再生して楽しむ“生録”という言葉や文化が定着しました。大間知さんも自ら多くの生録会を開催され、その普及に務められましたね。

O. 今となっては楽しい思い出ですね。そういえば、当時録音機の性能が良くなって「生演奏より生々しい」などと面白い表現をする方もいらっしゃいました。また“テープレコーダー研究会”とのジャズ・合同生録会での出来事です。生音、録音・再生音、生音、と交互に比較試聴をしていると、生演奏のときに観客席から「オーイ、生音、ハイが出てないぞ」とヤジが飛んだことがありました(笑)。よき時代だったともいえますね(笑)。

M. やがて、CDの出現でオーディオの世界はデジタル時代を迎えました。TEACさんもESOTERICブランドを立ち上げられましたね。

O. 1987年、ハイファイ製品と最高級製品をブランド分けし、さらなる高みを目指してESOTERICブランドを誕生させました。おかげさまで、ハイエンドユーザーの大きな支持を得ることができ、また専門誌からも良い評価をいただきました。

M. 確かに、ESOTERIC製品は海外のハイエンド製品と肩を並べることになりましたね。特に思い入れの強かった製品は何でしたか？

O. ESOTERICブランド製品では、私が商品企画を担当したVRDS・CDトランスポートP-0です。CDが登場して15年目の1997年発売ですが、まだまだCDには聴きだせない未知の情報が隠されているはずであるとの疑問に答えるべく企画・開発をした自信作です。

M. まさにESOTERICブランドの威信をかけたフラグシップモデルでしたね。いろいろな新機軸技術に加え、その重厚感溢れる外観にも驚かされました。

その後、大間知さんが責任者となりESOTERICは独立部門となりましたね。

O. はい、2002年TEAC ESOTERIC COMPANYが設立され、私が社長を務めることになりました。

M. 名実共に大間知さんがESOTERICブランドの顔になられたわけですが、製品化にあたって、特に大間知さんが留意されてきたところはどんな点でしょうか？

O. 私は以前から「製品は自分の目の届くところで設計・生産する」ということを提唱、実践してきました。現在では、近隣の青梅市で作っています。Made in JapanならぬMade in Tokyoといえるでしょう。また、製品は全て開発・設計の時点から開発者と共に音決めをしていますが、完成した商品をかかなりの台数抜き取りでオーディオルームの大型システムでチェックしてから出荷するようにしています。

M. ESOTERICの音のポリシーがブレないのはそこですね。

ところで、大間知さんはSA-CDの熱心な支持者として、ハードはもちろんソフト制作にも努力されていらっしゃるんですね。

O. 私は、SA-CDは現在ハイエンド・オーディオの中でも最もクオリティーの高いものであると信じています。SA-CDのソフト、ハードは対になって出て行くべきだと考えています。しかし残念ながら現在発売されているSA-CDソフトにはまだまだ改善の余地が残っていると思いました。そこで、私はマスターテープの音にできるだけ近い優れた音のSA-CDソフトを自ら作ることにしたのです。また、SA-CDハード普及のためハイエンド・メーカーにSA-CDメカデッキの供給も行っています。

M. 本来ならばフォーマットを立ち上げたソニーやフィリップスなど、もっともっと頑張ってもらいたいのですが、こうしてESOTERICはじめハイエンド・オーディオ専門メーカーやオーディオ・レーベルがSA-CD普及に頑張っているのはオー



エソテリック社製
SA-CDメカデッキ

ディオ・ファンには嬉しいことです。特に ESOTERIC の SA-CD ソフトはオーディオ・ファンのみならず音楽ファンの間でも高く評価されていますが、その秘密は何でしょうか？

Q. ハイエンドの機器はどんどん音質が改善されていますが、残念ながらソフトの CD や SA-CD はまだまだ改善の余地があるように思いました。マスターテープの音を聴くと素晴らしい音がしているのに、ディスクになるとその魅力が欠けてしまうのです。これはマスタリング時の問題だと考えました。そこで、実際スタジオに行ってその作業を自分でもやってみると多くの問題点に気づいたのです。例えば、機材の配置、信号伝送ケーブル、電源事情、ノイズ、そしてクロックなどの問題などです。そこで、ハイエンド・オーディオの世界では拘っていることをプロの世界に持ち込んでみたのです。やるべきことは多かったのですが、幸いスタジオ・エンジニアの協力をいただき、それらをひとつひとつ解決していきました。そして、実際のマスタリングは最も電源事情が良い日や時間帯で行うなど妥協せずにとことんやってみたのです。おかげさまで、結果は音に表れました。



マスタリング中の大間知 基彰 氏と
JVC 杉本 一家 氏 (右)

M. 大間知さんは TEAC 時代にも 2トラック 38cm のオープンテープのソフトを手がけられましたね。その時の経験も大いに生きたのではないのでしょうか？

Q. あれは“マスターサウンド”と称した自主録音テープソフトです。第一弾は当時 2 回目の来日を果たしたゲヴァントハウス・カルテットのベートーベン弦楽四重奏曲ハ短調「第 4 番」とハイドンの「アンダンテ・カンタービレ」でした。その後十数タイトル制作しましたが、そのころからマスターテープの音の素晴らしさを体感し、何とかストレスのない自然な音を皆さんに届けたいとの思いを募らせていました。

M. その情熱が今の SA-CD ソフト「名盤復刻シリーズ」に息づいているのですね。その選曲や制作ポリシーをお聞かせください。

Q. 私の音楽そしてオーディオ人生の中で大きく感動を受けたレコードの中から、それこそ「独断と偏見」で勝手に選ばせていただき SA-CD として復刻しました。もちろん、演奏が優れ音の良いものを基準としています。

M. オリジナル音源は海外のメジャーレーベルのものがほとんどですが、それなりにご苦労も多かったのでは？

Q. はい、まず復刻の許可をもらうのに数ヶ月、場合によっては 1 年以上も交渉が必要なこともあります。また、オリジナルのマスターテープからダイレクトにマスター音源を作るために経費もかかります。初期には先方が何故今復刻盤を作るのかという疑問を払拭するのもにも苦労しましたが、おかげさまで現在ではほとんどのレーベルが協力してくれますし、ESOTERIC のディスクを高く評価していただけるようになりました。

M. 今までのリリースの中で特に思い入れの深いタイトルがありますか？

O. そうですね。特にといわれるならば、2010年4月に発売したショルティ／ウーンフィルのワグナー「ニーベルングの指輪」全曲、2011年6月に発売したカルロス・クライバー／バイエルン交響楽団のヨハンシュトラウス「こうもり」ですね。いずれも自然で鮮明な音の中で見事な空間情報が表現されています。

M. 私も ESOTERIC の SA-CD のファンの一人ですが、この「こうもり」と同時期に発売された、カラヤンの「メリー・ウィドー」も素晴らしいものでした。その後、何組もオペラボックスを発売されましたが、オペラファンにはとても嬉しい選曲でした。

ところで、この7月10日に珍しくジャズの復刻盤が発売されますね。

O. 今回はジャズの名門「ブルーノート」レーベルの珠玉の名曲のテイクにやっとの思いで辿りつきました。ブルーノートはこだわりのレーベルといわれ、その音はもちろんジャケット・デザインまで独特のものです。そこには創業者のアルフレッド・ライオン、そしてその嗜好を十分に理解していた録音エンジニア、ルディ・ヴァン・ゲルダーがその独自のサウンドに仕上げていたのです。なにせ録音は1950年代後半ですが、よくぞ名演奏をこんな素晴らしい音で残してくれたことに感謝せずにはいられません。ジャズの魅力、ブルースの血を引く物憂げな不協和音、その心に沁み入るブルーな響きをどこまで再現できるか、今回は ESOTERIC レーベルを立ち上げたプロデューサーとして、さらに一段高い音楽的完成度を JVC のマスタリング・エンジニア杉本一家氏と共に妥協を排したリマスタリングを心がけました。このことを天上のジャズの巨人たちに報告したい思いです。



エソテリック 6 Great Jazz
品番：ESSB-90122/27 (6枚組)

その結果がどのように音として現れているかは是非皆様の耳でお確かめください。

M. 今回はロゴマークも ESOTERIC の文字とライオンが組合わされていますが、これもアルフレッド・ライオンに対するオマージュですね。

O. そうなんです。中にステッカーのおまけも入っています。是非お楽しみください。

M. 今からとても楽しみです。今後も素晴らしいソフトまたハードの製品を期待しています。本日は長時間ありがとうございました。

(文責 森 芳久)